

トピックス

病害虫今昔物語 ～かつて大流行した「イネ縞葉枯病」の発生にご注意を!!～

近年、ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病の発生が増えている。2001年以降ほとんど発生をみなかったが、昨年度は県西部を中心に被害が発生した。①ウイルス保毒虫率に増加の兆しがみられること、②本田でのヒメトビウンカ発生量が増加傾向にあること、等から今後も被害が拡大すると予想され、総合的な対策に取り組む必要がある。

内 容

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、発病すると治療できないやっかいな病害である。1980年代には本病が県下全域で発生し、減収率が20%を超えるなど大きな問題であった。当時の本病ウイルス保毒虫率は10%程度と高く(図1)、県下でも被害の大きかった県西部における発病株率は50%前後と高かった(図2)。防除の徹底により、保毒虫率、発病程度とも減少し、2001年以降は発生がみられなくなったが、2008年から保毒虫率が再び増加傾向を示し、昨年度は西播地域を中心に被害が発生した。本病が沈静化した1990年代半ば以降に斑点米カメムシへと防除の重点が移行したこと等を要因とし、近年の8月におけるウンカ発生量が過去と比較して増えている(図3)。また、昨年度は8月の保毒虫率が5月時点より高くなっており、今後も被害が拡大する可能性が高いと考えられる。なお、麦作地帯では春に麦で増えたウンカが麦刈後に水田へ飛来し発病を促進するおそれが

あるので、本病の発生にとくに注意が必要である。

普及上の注意事項

本病の対策として、①ひこばえにおける感染株(写真)は保毒虫率を高める要因となるため、本病発生地域ではひこばえを早めにすき込む、②発生状況に応じた薬剤防除の実施によりウンカ個体数を減らす、等の総合的な防除が必要となる。

田中 雅也(環境・病害虫部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-1222)

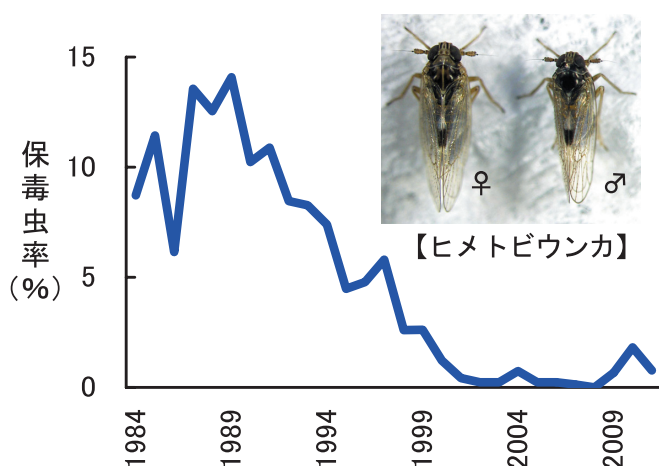


図1 県内におけるヒメトビウンカ（第1世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

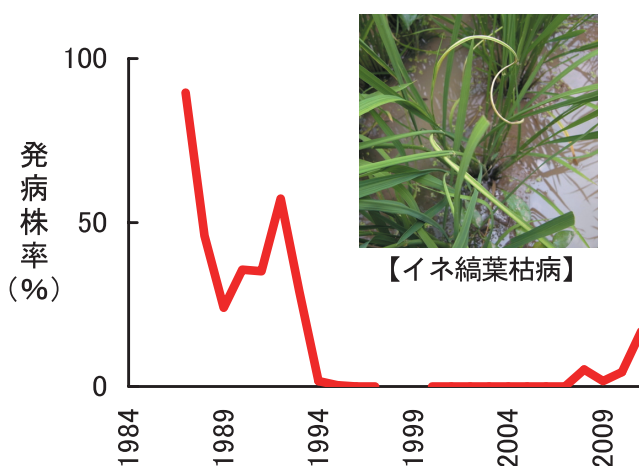


図2 8月下旬のイネ縞葉枯病発病株率の推移（県西部）

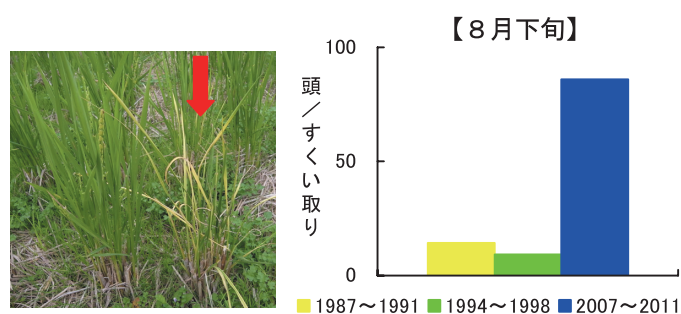


写真 ひこばえの症状(矢印) 図3 ヒメトビウンカ発生量の比較(県西部)